

第32回 12・8平和のつどい
できなかった
ことには
できない



黒川の女たち

後援

監督 松原文枝 語り 大竹しのぶ

高知県（高知県は公益に資する自由な議論の場の確保のため当該事業を後援している）・高知市・KUTVテレビ高知・KSS
さんさんテレビ

撮影：神谷潤 金森之雅 編集：東樹大介 プロデューサー：江口英明
製作：テレビ朝日 配給：太秦 2025|日本|99分|ドキュメンタリー

文化庁文化芸術振興費補助金（日本映画製作支援事業）| 独立行政法人日本芸術文化振興会

kurokawa-onnatachi.jp

RKC高知放送・高知新聞社・朝日新聞
高知総局・毎日新聞高知支局・読売新聞
大阪本社高知支局・こうち生活協同
組合・高知医療生活協同組合

1945年 関東軍敗走の満洲で待ちうけた、黒川開拓団の壮絶な運命——
戦争と性暴力の事実、いま知るべきことがここに在る。



次に生まれるその時は、 平和の国に生まれたい

〔接待〕を強いられた女性の詩

高齢になった生存者の女性たちが、
その身に背負ったトラウマと
ステイグマから解放されるプロセスを、
このドキュメンタリーは描いた。

「黒川」はそれを象徴する名前となった。

「反省しない」日本は、黒川に学べるだろうか？

上野千鶴子

伝えなくてはいけない。

自分たちの孫やひ孫が幸せであり続けるために。

過去をきちんと知り、

未来を考えることをしなくてはいけないと思います。

大竹しのぶ

記憶が歴史になる前に、未来へ遺す。 戦禍を生きた人びとの証言。



80年前の戦時下、国策のもと実施された満蒙開拓により、中国はるか満洲の地に渡った開拓団。日本の敗戦が色濃くなる中、突如としてソ連軍が満洲に侵攻した。守ってくれるはずの関東軍の姿もなく満蒙開拓団は過酷な状況に追い込まれ、集団自決を選択した開拓団もあれば、逃げ続けた末に息絶えた人も多かった。そんな中、岐阜県から渡った黒川開拓団の人々は生きて日本に帰るために、敵であるソ連軍に助けを求めた。しかしその見返りは、数えて18歳以上の女性たちによる接待だった。接待の意味すらわからないまま、女性たちは性の相手として差し出されたのだ。帰国後、女性たちを待っていたのは労いではなく、差別と偏見の目。口さがない誹謗中傷。同情から口を塞ぐ村の人々。込み上げる怒りと恐怖を抑え、身をひそめる女性たち。青春の時を過ごすはずだった行先は、多くの犠牲を出し今はどこにも存在しない国。身も心も傷を負った女性たちの声はかき消され、この事実は長年伏せられてきた。だが、黒川の女性たちは手を携えた。したこと、されたこと、みてきたこと。幾重にも重なる加害の事実と、犠牲の史実を封印させないために――。



と き：2026年12月6日（日）①10：00～②14：00～

ところ：こうち男女共同参画センター「ソーレ」

前売り券1000円 当日券1200円 障がい者・学生500円 高校生以下無料

主催：12・8平和のつどい実行委員会（☎088-873-9066 森田）